

サンタクロース

本田健司さんからご紹介にあずかった尾添史朗です。本田さんは高知県にてよき先輩であり、よき飲み友達でありました。最初に出会ったのは私が安芸総訓に赴任してすぐに総訓の先輩に連れられ夜須町という所にテニスに行ったとき、本田さんがおられたように思います。そのころ本田さんは高知技能開発センターにおられ、宿舎も高知市内にありました。そのときから高知市内に飲み会、遊び、教会（私はクリスチャンです）に行ったときは、よく本田さんの宿舎に行っていました。

高知県にいるときは、本田さんと同様に高知市永国寺町にあります高知聖パウロ教会に大変お世話になりました。そのときに教会の行事によく参加させていただきました。キリスト教の行事はイースター（復活祭）、収穫祭などいろいろとあるわけですが、クリスチャンでない人であってもクリスマスはご存知のことと思います。私の所属している教会では、クリスマスイブやクリスマスの日には礼拝の回数が増えます。そして日曜学校（教会に来る子どもたちのための学校）も、それに合わせて礼拝、祝会が行われます。子どもたちに対するクリスマスの祝会といえば、やはりサンタクロースの登場になります。サンタからプレゼントをもらうときが一番子どもたちが喜ぶときです。私は幸運にもそのサンタ役を2回も演じたことがあります。私は約3年ごとに転勤するので子どもたちに顔があまり知られていない。だからサンタに適役らしいのです。

サンタを演じたのは1回目は高知、2回目は去年、現在住んでいる千葉です。サンタを演じるといっても、ただ単にプレゼントを配るというわけではありません。演じるにあたってはいろいろな打ち合わせがあります。衣装合わせ、インタビューの内容ある

いはどのようなタイミングで登場するのかなどなど、前もって司会者と入念な打ち合わせを行って祝会にのぞむこととなります。去年12月に行った本番がどんな感じなのかお伝えしたいと思います。

入場はクリスマスソング「あわてんぼうのサンタクロース」の3番が終わったところで、ドアをノックして鈴を鳴らしながら、拍手の中を歩きます。司会者「サンタさんよく来てくれました。お座りください」、サンタ「ありがとう」、司会者「さっきまでどこにいたんですか」、サンタ「さっきまでフィリピンにいたんだけど、みんなが呼ぶ声が聞こえたので急いでここに来たんだ。次にアメリカに行く予定があるのであまり時間がないんだ」、司会者「忙しいそうですね、でもどうやってここに来たんですか」、サンタ「空飛ぶトナカイのそりでやってきたんだ」、司会者「トナカイのそりはどこに置いてきたんですか」、サンタ「近くの百貨店の駐車場に置いてるよ」...（中略）...。司会者「今度はみんなから質問してください。質問のある人」、少年A「何で夜に来るんですか」、サンタ「みんなが寝てる間に来ないと、引き止められて仕事にならないからだよ。今日は特別なんだ」、少年B「何歳なんですか」、サンタ「年を取りすぎて何歳かは覚えていないのだが2000年以上は生きている。私は人間ではなく妖精なので長く生きられるんだ」（以下省略）。これ以上書きますと長くなりすぎますのでこれくらいにします。この続きはクリスマスソング「サンタが町にやってくる」を歌いながら、サンタとみんながダンスをし、プレゼントを配り、退場します。

このときクリスマスの祝会としては結構盛り上がったそうで、なんとか大役をこなしました。教会の祝会でサンタクロースを演じることは、みなさんの

想像以上に大変なことだと思われたのではないでしょう。でもやってみると意外と楽しいものなのです。

次に紹介させていただく方は、私の大学時代の友人でありますポリテクカレッジ小山の芹澤幸一さんです。彼は最近忙しそうなのですが、元気なんでしょうか。

リレートーク【2】

長崎県商工労働部職業能力開発課

高松 稔

懐かしの「訓大寮生活」

「高松さん、電話です」の声で受話器を取り、「ハイ、高松です」「白川幸太郎です。ご無沙汰してます。先輩もお元気ですか」の声が聞こえてきてびっくり...

今から18年前の昭和55年（彼の結婚した年だったと思う）以来の電話で、懐かしく話をしたあとに「リレートークの原稿をお願いします」と頼まれ、今回、書かせてもらうことになりました。

受話器を置くと同時に「訓大寮」の思い出が走馬燈のように頭の中を巡り始めました。そこで、今回の題材は、昭和48年から昭和51年までの訓大寮生活をひもとくことにしました。

まずは、白川氏との関係ですが、私が2年から4年までの3年間で408号室で苦楽を共にした仲間です。

当時は、オイルショックの時代で、トイレトーパーが確か4ロールずつ定期的に配られ、出すものも出せない時期がしばらく続いた記憶があります。また、長嶋選手の引退セレモニーを見て、感激した時代でもありました。

私が入学した当時は、訓大（職業訓練大学校）は、小平市にあり、昭和48年10月に現在地に移転したと記憶しています。私は、大森でアパート暮らしをしており、小平まで通学してましたが、相模



原市橋本への移転を契機に寮に入ることを検討しました。

「寮生活」は「厳しい、きつい、汚い」の3Kのイメージがありましたが、新しい寮になることであり、大森からはとてもではないが通学できないということで入寮を決意しました。

「寮の部屋決め」は、寮食堂に全員集合して、抽選で決められました。また、ヤジを受けながらそのヤジに耐えて1人ひとりが挨拶をさせられた記憶があります。当時は、4人部屋で「4年生、3年生、2年生、1年生」の部屋構成でしたが、幸いにも「4年生、2年生、1年生」の3人部屋でした（現在は、個室だそうですネ！）

「部屋での担当」は、ほとんど1年生がすることになっていました。掃除、食器洗い、整理整頓、先輩からの言いつけを速やかに、かつ、忘れることなくしなければなりません。ある日、4年生の先輩から「明日は授業が午前中からあるので、早く起こしてくれ」と言われ、緊張しながら深い眠りにもつけず、早朝、起こしたところ「なぜ、こんなに早く起こすのか」と怒られたことを思い出します。これが、「寮生活なのか」とそのとき思いました。

「各科・各部・各部屋等のコンパ」は最も恐怖感を抱かせるものでありました。入寮したばかりのあ

る夜、某クラブコンパがあり、「部屋回り」ということでお酒（日本酒か焼酎か、わけのわからない水）を持って、部屋の住人にお酒を振る舞う習わしがありました。部屋回りに来た先輩曰く「この部屋の4年生は、
 だったな、探して連れてこい」。必死に探したあげく、部屋の先輩曰く「ほっとけ」。どうしてもなく同級生の部屋で時間をつぶし、自室に戻った記憶があります。

「部屋長」は、自由でした。また、あこがれの地位でもありました。しかし、昭和20年代生まれと昭和30年代生まれの「時代の流れ、考え方のギャップ」がありました。ある日、部屋で飲み会をしたとき、酒を飲むように1年生に言っても飲まない。1年のときはそうではなかった。無理やり飲まされ、真夜中に酒を調達させられた「良き時代？」でもありました。

思い出は尽きませんが、今は、良き先輩、良き後輩がいて、上下の人間関係のいろはを教えられた「人生で有意義な時代」であったように思います。

そろそろ、バトンタッチすることとしますが、今回は、私と同期の「北海道立工業技術センター・産業デザイン部」で活躍されている岩越睦郎君を紹介します。では、よろしくお願ひします。

3号以降の特集決定

1号で報告しましたように「技能と技術」誌中ブロック編集委員会（平成11年11月17日、ポリテクカレッジ浜松にて開催）、西ブロック編集委員会（平成11年12月3日、ポリテクカレッジ香川にて開催）を経て、本年の3号以降の特集テーマが決定しました。

3号 国際技術協力

4号 卒業製作を指導して、ポリテックビジョン '99

5号 最近の普通訓練の特徴、応用課程の訓練について

6号 マルチメディア教材

4号と5号は特集が2つとなります。読者の皆様からの投稿をお待ちしています。【編集部】